

# 社会委員会通信

No. 59

2022. 8. 28

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

8月7日(日)、平和聖日講演会を「ウクライナ・ロシアの宗教とその文化的背景」という題で、近藤喜重郎さんを講師に開催いたしました。コロナ禍、猛暑の折であったことに鑑み、日頃の礼拝のYouTube配信全登録者に配信をして、画像共有の困難さを克服するために、教員全体に予め印刷したレジュメを配付するという方法をとりました。当日同時YouTube視聴22名、教会会場出席者12名、外部の同時視聴者7名という方の参加があり、一週間後のYouTube再生回数は、80回ほどになっています。ロシアのウクライナ侵攻が先の見えない状況にある現況も含めて、今回の方法は、新しい講演会の形を凶らずも提示できたと思いますし、今後に通じる良法であるとも考えられます。

ウクライナとロシアの正教会、歴史の流れについて、非常に丁寧にお話いただきました。その中で私は、「我々の宗教」という言葉が身にしみました。一朝一夕の問題ではないのですね。わたしたちは何をなすべきか。講演を糧として考えていくべきです。会場参加者のお一人の方の質問に「これからどうなると思いますか」というものがありました。ここから、正に「これから」を考えなくてはなりません。  
(社会委員長：R・A)



## ウクライナ・ロシアの宗教とその文化的背景

近藤喜重郎

### ◆はじめに

こんにちは。近藤喜重郎です。このたびは平和聖日講演会の講師にお招きいただき、ありがとうございます。本日は、「ウクライナ・ロシアの宗教とその文化的背景」と題して、お話をいたします。

私はふだんロシア語教員として働いています。研究者としては、アントニイ・フラポヴィツキイという人とその教会の研究を中心として、キリスト教史・文化論・文明論の研究を続けています。

アントニイ・フラポヴィツキイという人は、現在のウクライナ、彼の時代の小ロシアのヴォルニニで12年間、ハリコフで4年間、教会管理の仕事をして、ロシア革命の混乱期にキエフとガリツィアの教会管理を任された人物です。

なお、この講演では、現在のウクライナの地名を「ウクライナ語読み」表記にカッコ書きで従来のカナ表記を付し、歴史的な話の中では従来のカナ表記を用います。また、人名については、ロシア語の綴りに合わせたカナ表記を用います。

## ◆ロシアとウクライナの現状（特殊軍事作戦以前）

まず、ウクライナとロシアは隣国です。2つの国の都、モスクワとキーウ（キエフ）の距離はおよそ760 kmです。これは、日本の横浜から見ると、青森県の青森や山口県の萩と同じ距離です。

ロシアはヨーロッパ最大の国で、その国土はユーラシア大陸の北部をほぼ含みます。その広さはおよそ1,710万km<sup>2</sup>。これはアメリカ合衆国の983万km<sup>2</sup>をはるかに超えるサイズです。そこに、日本の1億2,500万より少し多い、1億5,000万弱の人が暮らしています。

ウクライナはヨーロッパで2番目に大きい国です。その国土は60万km<sup>2</sup>です。日本の38万km<sup>2</sup>と比べると、ずいぶん広いですね。そこに4,200万人、つまり日本の3分の1ほどの人が暮らしています。

この通り、ロシアとウクライナの両国は、土地に恵まれています。また、どちらも多民族国家です。ロシアは国民の81%が民族としてのロシア人で、他に180以上の民族が暮らしています。ロシアは憲法で、自国を多民族国家として規定していて、それぞれの民族共和国では、ロシア語と自分たちの言語の両方を学び、使うことができます。ウクライナも同様に多民族国家です。民族としてのウクライナ人として登録されているのは、国民の78%です。

ただ、同じ多民族国家でもイメージが少し違います。ロシアではタタール人が5%、非白人が10%程います。つまり、ロシアの場合、5人に1人が非ロシア人で、タタール人は20人に1人です。これに対して、ウクライナ国民のロシア人は17%であり、ロシア人とウクライナ人を足すと9割を超えます。つまり、ロシアは白人以外の諸民族を含めた多民族国家であることが日常生活でも分かるのに対し、ウクライナでは、白人以外が目立ちません。

本日のテーマは、ウクライナとロシアの宗教事情です。もちろん現在は、キリスト教、イスラム教、仏教、ユダヤ教ほか、様々な宗教が存在しています。その中で主流は、キリスト教の中でも正教のキリスト教です。ただ、組織的に見ると、2つの自治教会、独立教会、帰一教会などに分かれています。字を見て、何が違うのか、すぐにはよく分からないと思います。

まず、ウクライナで最大の信徒数を誇る自治教会は、日本のメディアでは、「モスクワ総主教庁系」と呼ばれることがあります。もう1つの自正教会は、「コンスタンティノーブル総主教庁系」と呼ばれています。この分類ですと、独立教会は、「キエフ総主教庁系」になります。このうちコンスタンティノーブル総主教庁系の自治教会とキエフ総主教庁系の独立教会は、2019年に合同しています。そのことは後ほどお話しします。

この流れで行くと、帰一教会は、「ローマ教皇庁系」になります。

このように、ウクライナのキリスト教会の中には、同じ正教会の中に「自治」「独立」「総主教庁系」、さらに「帰一」など、日本で馴染みのない言葉が並んでいます。

なぜこんなことになっているのでしょうか。このことを理解するために、この後、順を追って見ていきます。

## ◆ロシアとウクライナのはじまり

まず、ロシアとウクライナのはじまりについてお話しします。



現在ウクライナの国土となっている土地は、緑豊かな平野です。その土地で農業を営む人々がいました。スラヴ人と呼ばれる人々です。彼らは、長い間森の中で暮らしていたという説があります。彼らは少しずつ黒海北岸の平野に進出しました。

ところが、その土地は、古来、アジアから馬に乗った騎馬民族がやってくる地域でした。彼らは、畑を荒らし、男を殺し、女子供をさらっていきました。

とは言え、それはずっと、というわけではありませんでした。彼らは、ウラル山脈とカスピ海の間を通過してやって来て、捕るものを捕るとどこかへ去っていきました。実は、ウラル山脈とカスピ海の間は、昔から「アジアとヨーロッパの境界線」と言われました。その間を通過して、遊牧民族たちは、アジアとヨーロッパの間を往来したのです。

ヨーロッパに現れた騎馬民族は、様々な地域の人々と交わり、時に住み着きました。今日はその中のブルガール族、ハザール族、そしてモンゴルを紹介します。ブルガール族は、現在のブルガリアを建国した人々です。ハザール族は、黒海北岸に大きな国を築いていました。モンゴルは最後にやってきた遊牧民族です。

他方、この地域を南北に往来した人々がいます。北欧のバイキングです。彼らは、世界史に言うノルマン・コンクエスト、イギリス建国をもたらしたことで知られていますが、東にも勢力を伸ばしました。川を通過して、東へ進み、南の黒海やカスピ海にまで進みました。現在のロシアやウクライナに住んでいたスラヴ人は、バイキングのことを「ワリヤーギ」または「ルーシ」と呼びました。ローマ帝国の人々は、〈ルーシの征服した土地〉〈ルーシの国〉を「ルーシア」と呼びました。

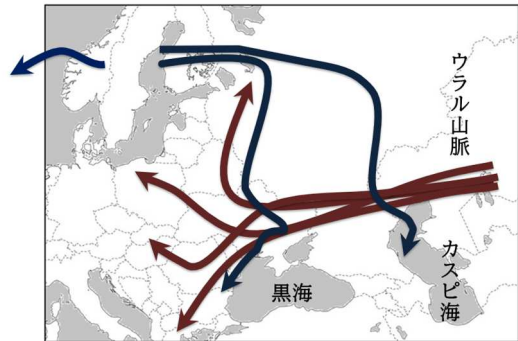
こうして、東はアジアから遊牧民族がやってきたルートと北からバイキングがやってきたルートがちょうど重なる交差点、それが現在のウクライナの土地です。つまり、この土地は、古来、様々な民族が奪い合う土地柄だったのです。これをひとつにまとめたのが、バイキングから出たリューリク族であり、伝説のバイキング、リューリクの曾孫であるヴラヂミル聖公です。

ヴラヂミル聖公は、988年、ヘルソンで東ローマ帝国の司祭から洗礼を受けます。そして、東ローマ帝国皇帝の娘と結婚し、ルーシの国をキリスト教国にします。これを受けて、東ローマ帝国の都コンスタンティノープルの総主教は、キエフに府主教座を設置します。

リューリクからヴラヂミルまで、つまり、ルーシの国が生まれてからキリスト教国になるまでの物語は、ウクライナ人にとっても、ロシア人にとっても、「子供時代の美しい思い出」のようなものになっていると言います。『正教会入門』。

このように、ウクライナもロシアも、ヴラヂミル聖公によってキリスト教国となったルーシの国から始まっています。では、なぜ、その後に分かれることになったのでしょうか。それは、ヴラヂミルが東ローマ帝国から、ギリシア人からキリスト教を受け入れたからです。

遊牧民族とバイキングの襲来  
(イメージ)



そこで次に、キリスト教の東西についてお話しします。



## ◆キリスト教の東西

まず、「正教」と「異端」という言葉を紹介します。正教は〈正しい教え〉、異端は今で言うと〈極端な教え〉という意味です。「あの人の言うことは極端だから気を付けようね」というような意味です。

異端	heresies	特定の使徒	キリスト単性説		
正教	<u>Greek</u> -Orthodox	使徒職	キリスト両性説	教会の無謬性	聖書と聖伝
旧教	<u>Roman</u> -Catholic	使徒職	キリスト両性説	教皇の無謬性	聖書と聖伝
新教	Protestant	万人祭司	???	???	聖書のみ

「異端」と呼ばれた人々は、例えば、キリストについてこう考えました。〈キリストは、自分の教えを特定の使徒にだけ伝えた〉と主張したのです。また、現在、聖書に含まれる文書の中の一部だけを自分たちの聖書としました。たとえば、マタイ福音書だけ、マルコ福音書だけ、ルカ福音書とパウロ書簡だけ、ヨハネ福音書だけ、あるいは別の文書を聖書だと主張する人々がいました。

これに対して正教の人々はこう考えました。〈キリストは、すべての使徒に等しく自分の教えを伝えた〉と主張したのです。それは、イエスの死後に使徒となったパウロも同様です。〈誰かひとり特定の使徒にだけ秘密の教えを授けたというのは極端な話だよ〉というわけです。

その後、キリストは神か人かという議論が生まれました。この時に、「キリストは神であって人ではない」または「キリストは人であって神ではない」と主張する人々がいました。彼らもまた、極端な意見を言う人々として、異端とされました。彼らの考え方を「キリスト単性説」といいます。

これに対して正教の人々はこう考えました。キリストは、「真に神でありかつ真に人である」と主張したのです。これを「キリスト両性説」といいます。

加えて、その頃から少しずつ、ローマの人々が、それまでになかった議論をするようになりました。彼らは、「ローマ教皇」という立場を主張し始めたのです。それは、〈ローマ教皇はキリストの代理人である〉〈ローマ教皇の判断に間違いはない〉という主張です。この考えを「教皇の無謬性」、この考えを指示する立場を「ローマ・カトリック」と言います。日本語では、西ヨーロッパでは古い教えという意味で「旧教」とも言います。ただ、旧教は使徒職とキリスト両性説を正教と共有しています。

これに対して正教の人々は、〈教会に間違いはない〉と反論しました。この考えを「教会の無謬性」と言います。

その後、〈ローマ・カトリックの教えは新約聖書の教えと違うのでは?〉と気付く人々が西ヨーロッパに現れました。彼らは、正教の人々からギリシア語を学び、改めて新約聖書をギリシア語で読むようになりました。新約聖書はそもそもギリシア語で書かれたからです。それで、ギリシア語で新約聖書を読んでみると、〈ラテン語で聖書を読む司祭やローマ教皇の言っていることは、やっ

ぱりオカシイじゃないか)〈そもそもローマ教皇という存在がオカシイじゃないか〉と文句を言う人々が現れました。この人々を「プロテスタント」と言います。日本語では、旧教より新しい教えという意味で「新教」とも言います。

プロテスタント＝新教の人々は、「万人祭司」「信仰のみ」「聖書のみ」という3つの信念に基づいてキリスト教を考え直す運動を始めました。これが、西ヨーロッパで始まった、いわゆる「宗教改革」です。

これに対して、ローマ・カトリックは、「聖書と聖伝」という言い方をし、正教会では、「聖書は聖伝のもっとも大切なひとつ」という言い方をしています。宗教改革以後、旧教でも聖書の訳し直しが行われていますし、今の日本でも、日本語に分かる形で聖書を訳し直すという作業が定期的に行われています。なお、新教の人々がキリスト両性説をとっているか、教会の無謬性を認めているかは分かりません。

このように、キリスト教には、大きく、正教、旧教、新教と3つのグループがあるのです。日本では、日本ハリストス正教会という名称の教団が正教のキリスト教を奉じています。そして、先ほどお話した通り、ヴラヂミル聖公が選んだのが、正教のキリスト教だったのです。

そこで次に、正教のキリスト教が「教会」というものをどう考えているか、その教会論を紹介します。



#### ◆正教の教会論

まず、107年ごろに殉教した、アンティオケアのイグナティオスという人がいます。彼は書簡を書き残しています。その教えによると、各地の信仰者の共同体は、主教、司祭、輔祭という聖職者の位階と機密によって「教会」となると言います。

ここで「機密」というのは、ユーカリストのことです。ユーカリストというのは、ローマ・カトリックでいう「ミサ」、プロテスタントでいう「聖餐」のことです。つまり、聖餐式について正しい教えを守る人、それを正しく執り行う人、それを正しく補佐する人がいる信仰者の共同体が教会だと言うのです。

また、258年ごろに殉教した、カルタゴのキプリアヌスという人がいます。彼は、「主教職は唯一の全体」「教会も1つの全体」という言い方をし、各地に様々な教会があるのではなく、世界にひとつの教会があると教えました。

イグナティオスとキプリアヌスの残した教えからは、必然的に会議が必要であることが分かります。教会では、誰かの権威による独裁や、みんなバラバラに好きなことを信じる個人主義、その結果生まれる孤立をよしとしません。自由でありつつ、調和と同意を求める姿勢が求められるのです。

この姿勢は簡単ではありません。ですから、特に受難節で祈ることを勧められる祈禱文は、その中で、賢さ、謙虚さ、忍耐、愛の心を求めます(聖エフレムの祝文)。賢さ、謙虚さ、忍耐、愛—この4つの言葉は別々のことを指しているようですが、同じことを指しています。つまり、正教で言う自由とは、感情の赴くままという意味ではないのです。そのモデルとされたのは、新約聖書

の『使徒言行録』15章の記述です。そこには、「聖霊とわたしたちは…決めました」（新共同訳）とあります。

こうして、ひとつの機密、ひとつの主教職、ひとつの教会という考えが、正教における教会論の基礎に置かれました。

このイメージは殉教者が書き残したものにに基づいています。言い換えると、教会の基礎が固まったのは、キリスト教が迫害された時代のことでした。この迫害は、コンスタンティヌス大帝がキリスト教に回心することによって終わります。

まず、ミラノ勅令によって、キリスト教が認められると、殉教と迫害の時代は終わります。また、コンスタンティノーブルという新たな都が建設されると、イタリア半島のローマは都ではなくなり、その権威は下がります。

こうした新たな時代にも、キリスト教会の人々は、会議を開いて、「ひとつの主教職」を守ろうとしました。そうして開かれた会議を「全地公会」と言います。全地公会の目的は、具体的に言えば、帝国全土に広がった信仰者の組織を整備することです。

迫害の時代にキリスト教を受け入れたのは、ギリシア語を公用語とした地域の人々でした。つまり、迫害の中でキリスト教について考えた人々は、後にローマ帝国が東西に分割された時に、東ローマ帝国に属した人々でした。反対に、西ローマ帝国に属したのは、キリスト教が帝国の保護を受けるようになった後に洗礼を受けた人々でした。当時、権威の低下したローマの人々が、続々と増える新たな信徒たちの間で自分たちの権威と立場を何とかして守ろうと苦心したであろうことは、よく分かります。

話を戻します。

「ひとつの主教職」を守るために、教会では、主として主教職の位階制と教会の自立性が整理されました。「主教」は、都市の教会の監督です。その中でも、大都市の教会の主教を「大主教」、帝国首府の教会の主教を「府主教」と呼びました。当時、ローマ帝国には、エジプトのアレクサンドリアとシリアのアンティオケアに首府がありました。そこで、都ローマと2首府の主教を府主教と呼んだのです。

ところが、新たな都コンスタンティノーブルが建てられると、その主教の地位が問題になりました。そこで、府主教の上に「総主教」の地位を設けました。その際に、ローマの主教が格下にならないように、総主教の座を「旧都」ローマ、「新都」コンスタンティノーブル、アレクサンドリア、アンティオケア、そして「聖都」エルサレムに置きました。このうち、ローマの主教が自らに特殊な権威を主張して、他の4人の総主教と袂を分かつに至る一連の出来事が、世界史に言う「東西教会の分裂」です。

こうして、総主教—府主教—大主教—主教の位階制が作られました。その一方で、教会の自立の程度に応じて、独自に頭を選出できる独立教会と、独立教会の頭の許可を得て頭を選出できる自治教会に分けられました。

この、「ひとつの主教職」を守るために作られた制度が、現在のウクライナとロシアのキリスト教会の問題に関わっています。そこで次に、ヴラヂミル聖公の残した国のその後を見ていきましょ

う。



### ◆キエフ・ルーシとタタールのくびき

まず、言葉の整理をしておきます。

〈ルーシの土地・国〉のことをローマ帝国の人々は「ルーシア」またはギリシア語読みで「ローシア」と呼びました。これに対して、〈〇〇のそば〉という意味の「ウ」、布切れの〈端〉や〈裾〉という意味の「クライ」に、地方を表す「ナ」がくっついた言葉が「ウクライナ」です。ルーシの国にとっても、隣国のポーランドにとっても、〈端・裾のそば〉という意味です。これらの言葉が、ロシアとウクライナという2つの国の名前になっています。

先ほど紹介した通り、ロシアとウクライナに「子供時代の美しい思い出」を残したのが、リューリク家の人々、そして、ヴラヂミル聖公でした。特にヴラヂミル聖公は、ルーシの国に大きな功績を残しました。

まず、ルーシをキリスト教国にしました。このことによって、ローマ帝国の人々から見ても、ルーシは蛮族の国ではなくなりました。また、近隣の諸王国の王族と姻戚関係を結びました。

こうすることによって、ルーシの国をヨーロッパの安定した大国にすることを目指しました。ヴラヂミルの残した国はしかし、問題がありました。

まず、ルーシという新しい欧州の大国でバイキングが支配した町々を息子たちに委ねました。そして、新しい町を建設しました。そうすることによって、国を安定させようとした。

その一方で、長男に大公位を継がせました。このことが、兄弟間の権力闘争と姻戚の干渉が絶えない状態を生み出します。つまり、地方の町を任された弟たちが、キエフ大公の位を望んだ時に姻戚の協力を得て、キエフに攻め込むということが繰り返されるようになるのです。

当然、弟たちは、自分たちの拠点の町を栄えさせるために知恵を絞ります。そのため、キエフを征服した弟たちは、キエフ大公位を確保しても、キエフにとどまらず、自分の町で暮らし続けるということが起こりました。結果、キエフは名目上の都となりました。

こうして、キリスト教の教えに基づいて、父子、兄弟たちが協力し合い、近隣の諸王国と共に栄える、というヴラヂミルの夢は、現実になりませんでした。現実はいむしろ、リューリク家に連なる都市国家が、キエフという名目上の都を中心として、緩やかに結びついた状態になったのです。

リューリク家の統治する都市国家が互いにキエフ大公位を争う中に、大きな変化がもたらされます。数百年ぶりに、アジアから遊牧民族の大軍が押し寄せてきたのです。それは、13世紀のこと、モンゴル帝国の襲来です。

キエフの町は、軍隊を出して抵抗したために、下町を残して壊滅させられます。キエフの町は廃墟になりました。それを受けて、ルーシの町々はモンゴル軍に服属します。ルーシの民が遊牧民族の奴隷になった時代のことを、ロシア史では、「タタールのくびき」と言います。

その後、モンゴル軍の動きが収まると、今度は北からスウェーデン、西からリトアニア、ドイツ、ポーランドがルーシの土地を侵略します。それというのも当時、ヨーロッパは十字軍の時代だったからです。ローマ教皇は、自分を認めない正教の町々も十字軍の対象とし、その土地の利権を欲し

たスウェーデンとリトアニア、ポーランドの王族は、それを名目として、ルーシの国に軍隊を差し向けたのです。

こうして、アジアから、そしてスウェーデン、リトアニア、ドイツ、ポーランドから侵略された時代に、ルーシの土地の人々がどのように生き延びたかを、次に見ていきましょう。

### ◆ルーシからロシアへ

まず、キエフ・ルーシについておさらいします。

「キエフ・ルーシ」とは歴史家が名づけた呼び方で、別名、「キエフ大公国」といいます。これは、バイキングの一派であるリューリク家がキエフの町を都として東スラヴ人を統治した時代と国を指します。

バイキングは元々、ノヴゴロドの地域に国を造っていました。ギリシア人との交易のために南下し、その途中に集落を建てました。それが町へと発達してできたのが、今のウクライナのキーウ（キエフ）、ベラルーシのポロツクなどです。

これに、リューリク家の公が建てた町々加わります。その中に、現在も残るヴラヂミルとヴォロディーマイル、リヴィウ（リヴォフ）、モスクワなどがあります。

そこへモンゴル帝国の大軍が押し寄せたのです。彼らがヨーロッパへ向かう途中でキエフの町を滅ぼし、ルーシの町々を征服していったのは、13世紀のことでした。キエフの町が滅ぼされた時、キエフの人々は、町と一緒に滅ぼされたわけではありません。ある人々は西へ、ある人々は北へ逃げていきました。とりわけ、コンスタンティノープルから派遣されていたキエフの府主教は、北へ逃げ、北東ルーシのヴラヂミルに滞在しました。ヴラヂミルというのは、先に紹介したヴラヂミル聖公が建てた町です。

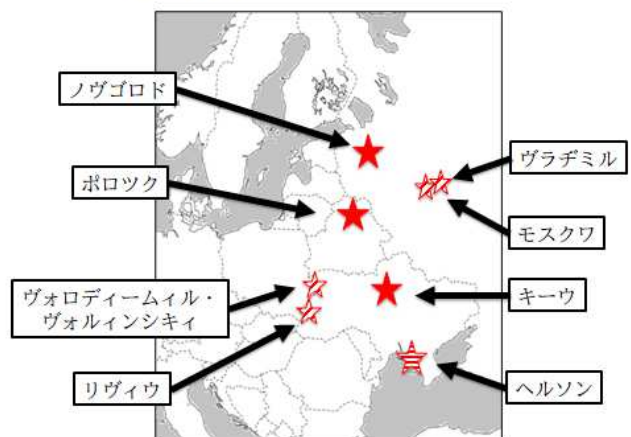
この様子を見ていたコンスタンティノープル総主教は、キエフの府主教座をヴラヂミルに遷しました。

ところがその後、モンゴル帝国もまた、帝国が分裂して、それぞれの勢力が弱まっていきました。以前と比べると弱まったとは言え、それでも十分に強かったわけですから、ルーシの町々は、モンゴル帝国の支配下で、ルーシの大公位を争い続けました。

この争いに最終的に勝利したのはモスクワの町でした。モンゴル帝国が最初にルーシの国にやって来た時は小さな村に過ぎなかったモスクワですが、その後、才能ある統治者に恵まれ、力を蓄えることに成功し、その力は、近隣の町々にもモンゴル帝国側にも認められることになりました。

その後、十分に力を蓄えたモスクワが、モンゴルへの徴税を拒否してから、完全に支配を脱した

講演で登場するウクライナとロシアの町々





後、ルーシの国の再建を始めた時代をモスクワ大公国の時代と呼びます。

この時代にモスクワは、全ルーシの府主教を迎え入れることに成功し、やがてその府主教座を総主教座に上げることに総主教全員が同意します。

こうしてモスクワは、名実ともに新しい〈ルーシの国＝ロシア〉の都となったのです。

この、ルーシからロシアへ至るお話については、『ロシアの源流』という本に詳しく書かれています。

さて、その頃、もうひとつのヴラヂミルのあったルーシの南西部ではどうなっていたのでしょうか。



#### ◆ルーシからウクライナへ

まず、モンゴル軍がキエフの町を滅ぼした後、ガリツィアとヴォルイニという2つの公国が1つになっていました。リューリク家のロマン公がノヴゴロドの町を任せられていたのですが、後にもう1つのヴラヂミルのあるヴォルイニに移されます。その後、ヴォルイニから見て南側にあったガリツィアのリューリク家が途絶えると、ロマンはガリツィアの公も兼ねて、2つの公国を1つにまとめます。さらに、キエフを征服して、キエフ大公位を受け継ぐことに成功します。

このような形で、ガリツィア・ヴォルイニ公国は、キエフ大公国の後継国家のひとつとなりますのですが、キエフ大公国とは違うこともします。まず、時にモンゴル軍と共に隣国のポーランドやハンガリーを侵略しました。また、ローマ教皇に働きかけ、ローマ・カトリックに改宗し、教皇から王冠を受けます。

このことが、キエフ府主教が西ではなく北へ移り住んだ理由です。

やがて、モンゴル帝国の力が弱まると、今度は、ポーランドとリトアニアがガリツィア・ヴォルイニ公国を征服します。

そして、1569年に、ポーランドとリトアニアが連合し、合同王国になると、旧ガリツィア・ヴォルイニ公国の貴族たちは、ポーランド貴族となることを望むようになります。実はこの頃、ポーランドとリトアニアでは、国王の世襲を認めず、王が死去すると新王を選挙していたのですが、自分たちもその選挙権が欲しかったのでしょう。面白いことに、新王の候補には、ポーランドとリトアニアの王族だけでなく、スウェーデンの王族もモスクワの大公も含まれることがありました。さらに一時、ポーランド・リトアニア・ロシアの連合王国を作ろうという計画が立てられたこともありました。

さて、ガリツィアとヴォルイニの貴族がポーランド貴族となるために、どんな方法をとったのでしょうか。それは、ローマ教皇を認めることによって、自分たちもローマ・カトリックになるという方法でした。ただ、そのために礼拝で使う言葉や様式を変更すると、司祭も一般信徒も混乱する恐れがあります。そこで、礼拝言語も様式も変えず、ローマ教皇の裁治権を認めることにしました。裁治権というのは、主教と司祭の人事権と教会税の徴収権のことです。この方法をローマ教皇は受け入れました。

こうして、「帰一教会」と呼ばれる特殊な教会が生まれました。「帰一」というのは、〈ローマ・カトリックに帰順した〉という意味です。近年ではこの言い方を避けて、「東方カトリック教会」

とも言います。

ただ、正教会では、礼拝の中で自分たちの教会の指導者のために祈ります。このため、ローマ教皇の裁治権を認めるということは、礼拝の中でローマ教皇のために祈ることを始めるということでもあります。

これに一般信徒と修道士は反発します。見た目は正教会のままなのに、ローマ教皇を認める言うのですから。反対にポーランドの人々は困惑します。ガリツィアとヴォルイニの人々は、ローマ・カトリックになったというのに、やっていることは正教会のままなのです。加えて、ローマ教皇を認めるということは、それまで認めていたコンスタンティノーブル総主教の裁治権を否定することになります。ですから、コンスタンティノーブル総主教は、キエフに府主教座を再建します。

こうして、正教会側から見ても、ローマ側から見ても、現地の人々から見ても、よく分からない、謎の状況が生まれました。



### ◆ワルシャワからモスクワへ

話は少し変わりますが、「農奴制」と言うとロシアの農奴制を世界史の教科書で習ったことを思い出す人もいるかと思います。実は、ポーランドも似たような状況でした。そして、キエフ周辺に元々いた貴族たちの農奴や土地をワルシャワに住む貴族に従う人々が不当に奪い取るということが繰り返されると、ワルシャワから独立しようとする人々が現れます。その運動が認められ、「ヘーチマン」または「ヘトマン」と呼ばれる、ポーランド王国の役職、日本でいう「将軍」職の人が管理する形での自治が認められます。

それでも、ワルシャワの力は強く、その不正に耐えかねた貴族が、ポーランドからの独立闘争を計画し、新しいヘーチマンになります。

この闘争のやり方が、モンゴルと対決したモスクワとは異なりました。モスクワは、自分に力がないと考えた時には、周辺の力のある人々の振る舞いからよく学び、充分な大義名分と実力を身につけるまで、じっと耐えました。ヘーチマンは、自分たちの力だけでは無理だと考えた時に、近隣諸国に援助を求めました。援軍を求めた相手は、クリミア汗国、オスマン帝国、モスクワ大公国、スウェーデン王国です。

問題は、援助を求めた相手の中にスウェーデンがいたことです。クリミア汗国もモスクワ大公国も当時の大国ポーランドと闘うことに慎重で、オスマン帝国もヘーチマンの自治区を保護国にすることに同意しますが、自治区の民衆はムスリムであるオスマン皇帝の支配を歓迎しませんでした。そこでモスクワは、同じスラヴ人であり、同じ正教徒であるということから、ヘーチマン自治区を自らの保護区とするために、ポーランドに宣戦布告します。これを自治区の民衆は歓迎します。ところが、スウェーデンは、ポーランドだけでなく、モスクワにも軍勢を送ったのです。漁夫の利を得ようとしたわけです。

これを受けて、モスクワとワルシャワはスウェーデンに反撃するために、講和を結びます。この講和と共にヘーチマン自治区は、親モスクワ派と親ワルシャワ派に分裂。ドニエプル川以西はキエフを除いてワルシャワに、ドニエプル川以東とキエフはモスクワに統治されることになり、キエフの

教会はモスクワ総主教の管理下に移りました。コンスタンティノーブル総主教は現在、この措置は違法であったと訴えて、モスクワと論争していますが、それはまた別の話です。

こうして、現在のウクライナの国土に含まれる地域は、ロシアとポーランドに改めて分かれることになり、お互いのすそ・はしの地域ということで「ウクライナ」の名称が「小ロシア」の名称と共に使われることになりました。なお、「小ロシア」の「小」は〈ももとの〉、「大ロシア」の「大」は〈拡大した〉の意味でギリシア人が使っていた言葉です。これらの言葉が差別的なニュアンスをもつようになったのは、その後のことです。

ただ、そうした言葉の変化を伴う様々な状況が長い間、展開されました。そして、1917年にロシア帝国が倒れると、ウクライナで独立運動が起こります。ただ、この時は、ウクライナ民族主義を掲げる人々と、民族差別のない社会主義国家樹立を目指す人々の対立が起こります。この時期にキエフ府主教に任じられた人物が、冒頭で紹介したアントニイ・フラポヴィツキイでした。

それから約20年後の1939年に第二次世界大戦が始まり、ソ連にドイツ軍が侵入すると、今度は、ナチスと共闘してウクライナの独立を目指す人々が現れます。彼らは、ナチスからも独立を認められず、戦後、北米大陸に亡命しました。



## ◆おわりに

本日のお話の終わりに、改めて現在のウクライナのキリスト教会を見てみましょう。

まず、ウクライナの2つの自治正教会は、どの総主教の管理を認めるかで意見が分かれています。

モスクワ及び全ルーシの総主教の管理を認めるグループは、現在のウクライナで最大の人数を保っています。

ただ、この教会は、今年2月のロシアによる特殊軍事作戦の発動以後、モスクワ総主教のために祈ることをやめています。また、今年5月にモスクワ総主教の管理から出ると発表しました。理由は明確です。今回の特殊軍事作戦が起こった後の2月末、このグループの主教たちはモスクワ総主教に連絡を取り、「ウクライナの大地における兄弟殺しの流血騒ぎを止めるように」「ロシア連邦の指導部に軍事行動を速やかに止めるよう呼びかけてください」と、また、「私たちは、繰り返し、ウクライナ全土の国家主権に属してきましたし、属していることを確認しております」と伝えたのですが、5月に入っても総主教からの返答がなかったからです。

とは言え、このグループが独立できるかという点、将来は未定です。なぜなら、コンスタンティノーブル総主教はすでに別のグループの独立を認めているからです。これは、先にお話した通り、2019年に独立正教会と合同しています。この合同は、ウクライナ大統領の発案でコンスタンティノーブル総主教の権威のもとで行われました。ですから、コンスタンティノーブル総主教が、ウクライナにもうひとつの独立教会を認めることは期待できず、他の総主教がそうした行動をとることも考えにくいのです。

もちろん本来なら、ロシア正教会が独立した時のように、モスクワとコンスタンティノーブルを含む総主教の全員がウクライナ正教会の独立を認めることが理想です。

